熊本県小学校教育研究会国語部会

令和６年度　研究テーマ

未来を拓く言葉の力を培う国語科学習の創造

～学びを自覚し，共に更新し続ける子供の育成～

研究部長　中里　宏

1　これからの社会に求められる力

今日の子供たちが成人して社会で活躍する頃には，AI，ビッグデータ，ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来し，社会の在り方そのものが現在とは「非連続」と言えるほど劇的に変わるとされている。また，近時の新型コロナウイルス感染症の感染拡大やロシアによるウクライナ侵攻等予測困難な事態が起き，平穏な日常が脅かされ，基本的な価値が揺らぐという事態に現在進行形で直面していることからも，今後は更に困難な社会問題が待ち構えているといっても過言ではない。

このような時代にある中で，２０４０年以降の社会を見据えた学校教育には，一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，ウェルビューイングを実現する「持続可能な社会の創り手」となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められている。

この資質・能力について考えてみたい。中央教育審議会（以下中教審）は，平成２８年答申において，次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として，「文章の意味を正確に理解する読解力」，「教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力」，「対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」などを挙げている。また，『「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（令和３年答申）』の中では，従来の日本型教育では「目の前の事象から解決すべき課題を見いだし，主体的に考え，多様な立場の者が協働的に議論し，納得解を生み出すことなど，正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められている」としている。そのことを踏まえ，国語科においても，言葉についての学びを進める中で，子供自身が学習の状況を把握し，主体的・自律的に学習を調整していく機会や，他者と協働して学び合う場を一層充実させていくことを通して，予測困難な時代を生き抜くために必要な「未来を拓く言葉の力」を子供に培っていくことが重要となる。その鍵となるのが，「言葉による見方・考え方」を働かせることである。

2　求められる国語科の力

国語科における，教科固有の見方・考え方とは，「言葉による見方・考え方」である。この教科固有の見方・考え方を働かせることが，教科の本質に迫る学びを生み出す。この「言葉による見方・考え方」を働かせるためには，まずは「言葉に着目して，自分なりの考えをもつこと」が必要である。また，この「言葉による見方・考え方」はその子の既有知識・生活経験に大きく左右され，同じ言葉でも，どのように捉えるか，どう使うかについては，納得解や最適解はあっても絶対解はないことの方が多い。その納得解や最適解は，他者との対話によって，実感を伴って獲得され，広がり深まっていく。

そのような対話を通して，「言葉による見方・考え方」を働かせながら自らを更新していく学びが求められている。そのような学習の過程があるからこそ，自分の考えを問い直し，言葉についての学びを積み重ね，自らの「言葉への自覚を高める」ことができる。これは国語科の改訂の趣旨及び要点の中の『学習過程の明確化，「考えの形成」の重視』にもつながる。

今後目指すのは，子供が『学びを自覚し，共に更新し続ける』授業である。このような授業を通して，小学校段階における国語科の学びを着実に蓄積し，他教科，日常生活，将来に波及するような汎用性のある資質・能力を育成していく。さらに，その力を活用し，予測困難な未来を仲間と共に切り拓いていきたいと自ら思えるような子供を育てたい。

3　研究の実際

（1）『学びを自覚し，共に更新し続ける』授業とは

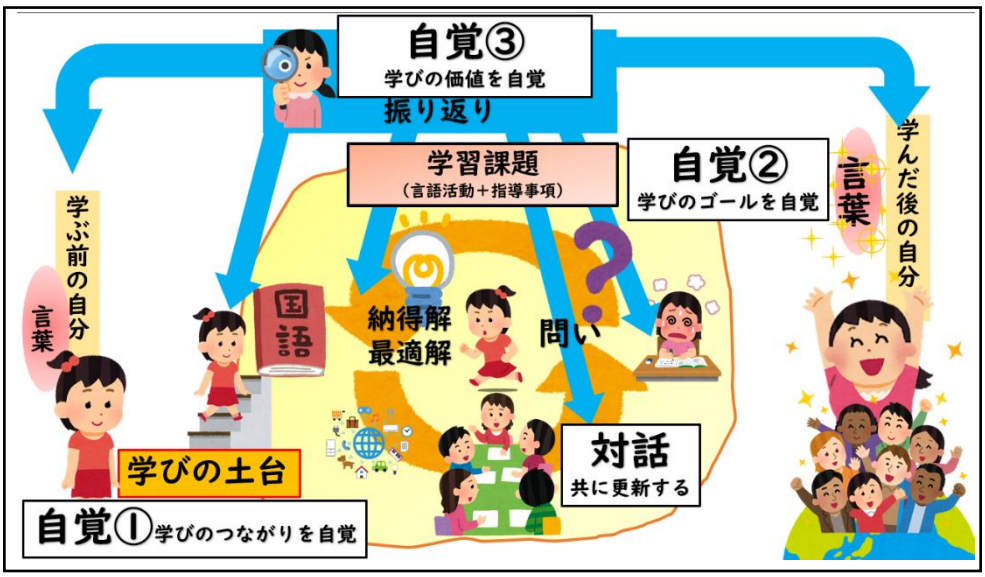
学びの自覚には様々な捉え方があるが，本研究においては，次の三つを重視する。

一つ目は，「学びのつながりを自覚する」ことである。子供たち一人一人が，これまでの学習と単元の学習がどのようにつながっているか自覚し，単元の学習に向けて準備ができるように，学びの土台をつくる場を設定する。

二つ目は「学びのゴールを自覚する」ことである。『学習課題』という学習のゴールを含めた大きな言語活動の枠組を設定することで，どんな言葉の力をつけるために，何に取り組むのかというゴールに向かった見通しをもち，柔軟な学習の過程で一人一人の子供が自分の問いにこだわり，かつ仲間と協働し学習を進められるようにする。

三つ目は，「学びの価値を自覚する」ことである。学習課題の達成を見据えて振り返ったり，新たに生まれた疑問や次に生かすこと，また，仲間との協働や解決方法等学んだ過程へと広げたりする等，振り返りの充実を図る。そうすることで，子供たちは自分の学びをメタ認知し，国語の授業の中で対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，実感を伴って言葉への自覚高めるとともに，その価値を自覚することへとつながる。このような振り返りの充実から，子供は自らの学びを調整し，自覚的に言葉に関わり更新する学習へと取り組むことができる。

また，そのような学びの自覚と更新には，対話も欠かせない。一人一人が考えを表出し，それを比較して共通点や相違点を見つけたり，主張を述べる際，根拠だけでなく，生活体験や経験などの理由づけを行ったりすることで対話が実現し，実感を伴って言葉を捉えなおしながら，言葉に対する自覚を高め共に更新していく。



【図１　学びを自覚し，共に更新し続けるイメージ図　】

以上のように,『学びを自覚し，共に更新する』ことを大切にしながら取り組むことで，子供は学び方を調整したり，見方・考え方を再構築したりしながら，自らを更新し続ける。このような授業を通して「未来を拓く言葉の力」を培っていくのである。

（２）視点について

『学びを自覚し，共に更新し続ける子供』を育む授業を展開していくために，以下に示す２つの視点を大切にした授業づくりを行う。また，昨年度実践を積み重ねていく中で，子供がどれだけ実感をもって言葉について自覚的に学び，納得解や最適解に迫っているかより明確にしていく必要があるのではないかと議論を重ねてきた。そこで今年度は「振り返り」を通して子供の言葉への自覚やその獲得の過程について見取ることに注力し，子供が主体的に自分事として言葉を捉え，対話の中でその言葉についての捉え方を再考しながら，共に更新していく姿に迫っていきたい。

【視点１：学びを自覚するための手立て】

子供たちが自らの学びを自覚するために，２つの手立てを行う。１つ目は学びのつながりを大切にした学習の過程と学びの大きな枠組みとなる学習課題である。単元を通じて単元構成や学習過程を工夫し，これまでの経験や学びと新たな学習をつなぐことで子供一人一人に「学びの土台」を作る。その上で，学びへの主体性を生み，学びの価値の拠り所を示す『学習課題』を立ち上げ，学習過程を工夫していく。さらに，２つ目はその学ぶ過程で子供が自らの学びを自覚できるように振り返りを充実させていく。

① 学びに向かう「土台づくり」と「学習課題」の工夫

学びの前提となる知識や経験と，新しい単元の学びがつながらず，導入からつまずいてしまう子供もいる。そこで，第一次において「学びの土台づくり」を行う。関連する絵本の読み聞かせや体験活動，既習事項の掘り起こしなど，一人一人の子供が学びに向かうことのできる土台をつくることで，どの子も学びのつながりを自覚でき，本単元の学習に取り組むことができる。さらに，その土台を前提として『学習課題』を設定する。その際,「指導事項」と「言語活動」の二つの視点を大切にした上で，子供の問いを大切にした学習課題という大きな言語活動の枠組みをつくっていく。その単元導入の際，子供が,「この言語活動を達成するために，こんなこと（指導事項）を大切にしていく。」という自然な学びの流れが生まれ，その単元の見通しをもつことができるように工夫することが重要となる。

また，この学習課題の探究が進めば進むほど，教室に沢山の価値ある考えが生まれたり，学習課題達成のための解決方法や表現方法においても選択肢が多様化したりすることも想定される。発達段階に応じて，そういった学びの個性化も視野に入れた学習過程や言語活動の捉え方も必要である。

② 単元を通じて自己の変容を自覚する『振り返り』

ア）振り返る視点の焦点化の工夫

言語活動に取り組む過程において学習課題の達成を見据えて振り返ったり，仲間と対話し協働して学んだ過程そのものを振り返えったり，課題へのアプローチの方法や，更に考えてみたいことや次の問いにつながることについて振り返ったり,単元始めの自分の考えと単元終末の自分の考えを比較して振り返る等，明確に視点をもって振り返るようにする。このように焦点

化された振り返りにより，単元を通して自分が実感を伴って捉えなおした言葉，学びの価値を自覚できるようにする。

イ）振り返る時，場，共有の工夫

振り返る時や場とは授業の終末に限ったものではなく，授業の冒頭や展開など柔軟に設定することも学びを自覚する上で有効であろう。また，学びの始まりと学び終えた自分の比較から単元全体の学びを俯瞰したり，どういった時に共有することが有効か単元構成や学習過程という視点で工夫したりすることも重要である。単元を通じて柔軟に振り返りを共有する場面を設定することによって，本時の価値や学習内容を，他者の振り返りから学ぶことができる。振り返りの共有を積み重ねることで，子供は他者の振り返りを通して自らの学び見つめ直し，学びを調整していく。

＜視点１学びを自覚するための手立て＞
① 学びに向かう「土台づくり」と「学習課題」　②単元を通じて自己の変容を自覚する『振り返り』

【視点２：共に更新するための工夫】

国語科において，「共に更新する」とは，他者と協働的に学ぶことである。自らの考えを表出し，比較・検討する場を設定することで，子供たちはお互いの考えの共通点や相違点に気づく。さらにその根拠や理由を述べ合いながら納得解を模索する中で，それぞれの「言葉による見方・考え方」が働き，考えが再構築され，更新されていく。

① 考えを表出し，比較する場

考えの比較・検討のためには，子供たちの考えの共通点や相違点が一目でわかるようなようにする手立てが必要である。言葉で伝える際はキーワードにしたり，シンキングツールやイラスト，色，動作化などを用いたりして思考を可視化する。そうすることで，子供たちは自らの考えを形にするために個々の「言葉による見方・考え方」を働かせる。そこで，なぜそういった可視化に至ったのか，根拠や理由に着目して対話する場を大切にしていくことが重要になる。

② 納得解や最適解を生み出す根拠や理由づけの充実

他者との対話を通して納得解や最適解を生み出すために重要になるのが，自らの意見を支える根拠と，集団を納得解へと導く理由づけである。子供の意見が想像や思いだけに偏るときには，教師が積極的に関わり，問い返しながら根拠を明確にする必要がある。そこから，子供の既有知識や生活経験を引き出して理由づけを行いながら，納得解を生み出していけるようにする。

さらに，そのやりとりを「根拠」や「理由づけ」が明確になるように，構造的に板書で整理することも大切にしたい。中・高学年では，意見を支える根拠や理由づけが適当か検討し，さらに深く考える場を設ける。このような学びを通して納得解を模索する中で，子供たちは個々の「言葉による見方・考え方」を働かせ，自らを更新していく。

【図２　根拠や理由づけの充実　】

＜視点２　共に更新するための工夫＞
〇全員が考えを表出し，比較する場　〇納得解を生み出す根拠や理由づけの充実